

Essay

私と書道と骨削り

白石病院 鴨川 淳二

愛媛は書道が盛んだ。今治市も例外ではなく、著名な書家を輩出している。中でも私の心を和ませてくれるのは、松本芳翠先生（伯方島生れ 1893-1971）の書だ。全国的に有名な書家であるも、地元には記念館がないことは、私には不可解だ。

私は小学生から中学生の初めまで習字教室に通っていた。書くのが楽しかったし、墨の匂いも好きだった。以後、勉強やスポーツに時間を奪われ筆を置いたが、一人暮らしになった大学時代も、自室にはいつも書の本があった。

医師として10年目（34歳）に、勤務地だった三島市で書道を再開した。通い始めた教室は図らずも芳翠流であった。

愛媛大学へ転勤後も芳翠流に憧れ、東温市から三島市まで通った。芳翠流は他流派には無い、鑿で石に刻んだような厳しい楷書に代表される。これを習得するのももざっと10年はかかる。さらに筆使いを極めると鏡像の文

字まで書ける達人がいる（図）。

そのうち東京本部が主宰する夏季講習会への参加を思い立ち、一人申し込んだ。その講習会で、以後お世話になる池上翠漣先生（芳翠先生の愛弟子）と出会うことになる。会場での試筆を目の当たりにして、その筆使いに肝をつぶされた。「この先生に習いたい」と即座に思った。

後日、見学のため池上先生のご自宅（東京）を訪ねた。その日はあまりに夢中になっていて、お稽古の始まった14時から休憩なしの計8時間、傍に立ったままで先生の筆を注視した。あまりに生き生きとした書体に心躍ったものだ。22時にお稽古が終わると、さすがに疲れ果て空腹。夕食に餃子と酢の物を御馳走してくださった。先生は、私の入会を快く受

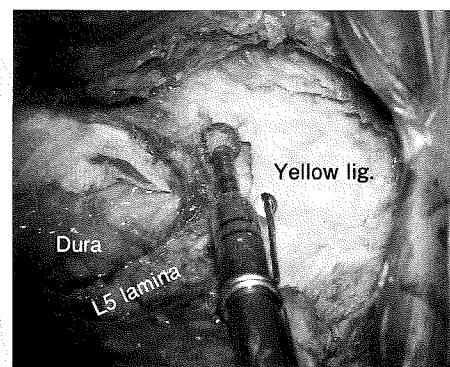


左馬（翠漣先生書）

け入れてくださり、品川でのお稽古が始まった。そして2014年夏まで7年間それは続いた。

さて、私の仕事は骨を削る事。背骨を掘削して神経組織を救済する。歯科で大きな音を出しながら歯を削る道具があるが、あれの親玉みたいな物で背骨を削っている。専門的には Dr Joseph S. Barr によって開発された surge airtome という（図）。敬意を込めて Barr と呼んでいる。

骨は硬いが、歯に比べれば軟らかい。骨の表面は皮質骨で硬く、内部は海綿骨で軟らかい。脊柱管に向かって皮質骨→海綿骨→皮質骨の順に削るが、最後の皮質骨は最底面の骨膜一枚のみ残して終わる。そうすれば安全だ。骨膜ごしに epidural varix や硬膜が目に入ってくる。私の場合、骨膜まで Barr で行き最後に Kerrison rongeur（鉗子）を使う。



Barr で骨を削る

Barr を持ち始めて15年を超えた。削る感覚である程度、骨質の予想がつく。脆弱な骨や、硬いだけの骨、粘りのある骨など、言葉では説明できないがそれを感じとれる。削り

ながら、各個体の運動性・運動能力までも推し量ることすらある。この際、顕微鏡は必須。顕微鏡と Barr の二つの道具を同時にうまく使うことが肝要だ。顕微鏡と Barr はそれぞれに扱いのコツがある。各々の細やかな特性を生かしつつ、二つの hardware を同調させながら手術を行う。

気は抜けないが、特に神経根の周囲を除圧することは楽しい。患者の痛みと直結していることを肌で感じられるからだ。数多くある整形外科手技の中でも、抜きん出てワクワクする。

しかしながら、Barr は究極の刃物なので慣れない医師は使うことを許されない。年に数回のみ、という使い方も辞めておいた方がよい。一瞬のミスは脊髄や神経根に不可逆的な損傷を与える。

以前、仲の良い外科医から、「神経の直前で Barr を止めるのは視覚ですか？手の感覚ですか？」と聞かれたことがある。私は迷わず「接地覚でしょうね」と答えると。「あ、先生は書道をしているから…」なんて言われた。

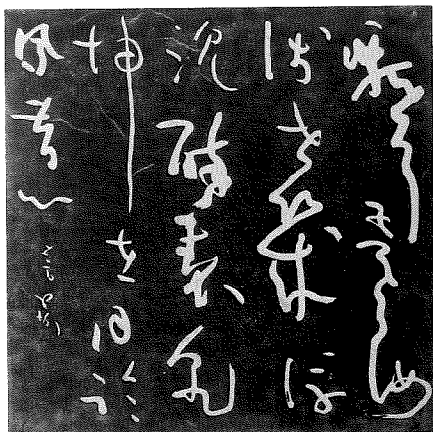
Barr work は視覚と触覚のみならず、脊髄に向かって掘り進めるため、危険に対する距離感を、その独特の匂いとして感じなければならぬ。言われてみれば似ているなと思ったものだ。でも筆は右手、lefty の私は Barr を左手で持つのだが…。

Barr の使用の要諦は「削り足らぬこと。削り過ぎぬこと。」である。駆け出しの人は

誰でも、掘削不足で神経症状の回復が悪い。慣れてくると掘削過多で不安定な脊椎をつくる。「いい除圧」は「いいころあい」で完遂することだ。

急ぐといけない。ゆっくりやると早く終わる。「いたわりとまごころ」を持って削ることだ。最近の私は、少しだけ力が抜けてきた。刃物を扱う人は、職人の域までに数十年かかるものだろう。思いあがることなく精進するしかない。

書道をしている時に、「石に刻みこみたい」と思ったことが何度もある。篆刻の精神だ。自分を何かに投影したいと思う、心ばえであろう。一方、骨削りは不要なものを削り取り、神経をあらわにすること。双方ともに一度削れば、二度と足せない。一回性として何の矛盾もない。



瓢詩碑（芳翠先生書、74歳、「瓢兮、吾と汝と。世を涉って幾浮沈。醉裏、乾坤在り。同に論ず夙昔の心。」）

る。不要なものが削ぎ落ちて、力の抜けた全力が可能になる。

その域までは程遠いが、ゆっくりでも流れるように削りたい。南光坊（今治市、四国55番札所）の石碑（図）にある、芳翠先生の草書のようにになりたいものだ。

基本の楷書を習得すれば、隸体と草体を織り交ぜて自分の書体を作ってゆくようにな